

# 高島藤樹会

(題字は、竹協曇卿先生によるものです)

発行

NPO法人 高島藤樹会

〒520-1224

滋賀県高島市安曇川町上小川225-1

電話・FAX 0740(32)4156

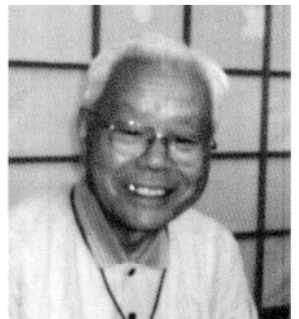
## 生涯を賭けて「藤樹研究」 の基礎を作った男 「岡田季誠」の偉業に学ぶ

萬木 甚一良

青柳の東医院の玄関脇に「岡田季誠先生屋敷跡」と書かれた石碑がひっそりと建っています。

この岡田季誠という方は、どんな人であったかを知る人は少ないと思います。今「藤樹研究」の基本的資料としては「藤樹先生全集(全五巻)」がありますが、この大部の基本的資料を提供してくれたのが、岡田季誠が編集した「藤樹先生全書」なのです。

岡田季誠は、東万木村(現青柳)で、父、仲実、母、美津(熊沢蕃山の妹)の次男として生まれ、幼少より学問を好み、常省先生(藤樹先生三男)の手で元服式を挙げたと言われています。長じて亡き藤樹先生の学問を後世に残すために、先生の書簡、遺文、手紙や書を集めて「藤樹先生全書」としてまとめ、藤樹先生の高弟であった泉仲愛、加世季弘等(いずれも備前藩士)に校閲を受け、当時、対馬藩江戸屋敷に賓客として滞在されていた常省先生に「序文」を依頼するため送付したのです。ところが折り悪く江戸の大火で対馬藩屋敷も類焼し、季誠が十七年もかけて蒐集した文書のすべてを灰塵に帰してしまったのです。季誠の落胆はいかかなものであったろうと思われませんが、彼の偉かったとこ



ろは、たいていの  
人ならこ  
こであき  
らめて止  
めてしま  
おうとい  
うところ

を、再び今一度蒐集をしておそうと  
考え、それから二十七年をかけて第  
二次の「藤樹先生全書」をまとめる  
のであります。すでにこの仕事を始  
めて四十一年たっていました。今度  
は序文を三輪執斎先生に再三依頼し  
て仕上げたのです。

大正十一年(一九二二年)藤樹神  
社の創建記念事業の一環として「藤  
樹先生全集」(全五巻)の編集刊行  
を加藤盛一先生(高知高等学校教  
授、元今津中学校長)を主任として  
八年かけて完成しますが、その本の  
基本的資料として、季誠の「藤樹先  
生全書」から多く採用され、また、  
藤樹頌徳会が発行した「藤樹先生年  
譜」にも多くの資料が採用されてい  
ます。

このように、今日、藤樹先生のお  
教えが連綿として受け継がれていま  
すことは、その陰に「何としても先  
生のすばらしい学問を後世に残した  
い」と尽力した岡田季誠の情熱と力  
によるところが多いと思います。

季誠は私たちに「人間として生ま  
れたからには、自分の生涯を賭ける  
仕事を持つことの大切さ」を語りか  
けているものと思います。

## ひじりの声

上田 藤市郎

古代中国で戸数をまとめる単  
位として、五戸を隣、五十戸を  
里、五百戸を党、一万二千五百  
戸を郷といったらしい。隣組、  
古里、故郷という語を思い浮か  
べ納得する。

藤樹先生が立志に至った「大  
学」によれば、世の中をよくす  
るには個人の生活態度、生き方  
が出発点であって、その誠意が  
周囲の人々に好影響を及ぼして  
社会がよくなるという。

犯罪の防止、環境浄化、ごみ  
の減量化なども、市民ひとりひ  
とりが誠実に実行することが大  
切です。

周囲の人々を思いやり慈しむ  
「仁」のところがけを、私たち  
は比較的身近な家族や親戚に対  
しては実践しやすいが、隣人、  
村里、郷里と範囲が拡大するに  
つれて実行力は弱くなりがちで  
ある。

例えば、「ごみの減量化」へ  
の取り組みも、自分の家庭や里  
(在所)では真剣に考えるけれ  
ども市全体への協力となると弱  
い。

高島市の戸数は一万五千戸、  
つまりはひとつの郷である。市  
のために尽力する行政や職員に  
協力し、せめて「仁」思いやり  
の心を、郷にまで広げて役立っ  
よう実践したいものである。